

2009年度第2学期 共通教育科目「哲学基礎B」

「認識するとはどういうことか？」
第7回講義 （2009年11月19日）

§7 実在論 対 観念論

1、経験的な知に関する基本的な問題

経験的な知には、次の4つが考えられます。

- ①感覚に基づくもの
- ②記憶に基づくもの
- ③推論に基づくもの
- ④伝聞に基づくもの

これらを検討して、②③④が最終的に①に還元されるだろうと考えました。

しかし、感覚だけから言えることはありません。なぜなら、そのためには言葉が必要であり、言葉の学習のためには記憶や伝聞や推論が必要だからです。

問1 「我々は言葉をどのようにして獲得するのか？」

問2 「感覚からどのようにして知が生じるのだろうか」

これらについては、いずれ考えることにしましょう。

その前に、次の問題を考えたいとおもいます。

経験的な知は、アприオリな知と異なり、事実に基づく知であり、事実に関する知です。つまり、それは世界の中の出来事や対象についての知です。「世界についての知がどのようにして得られるのか」という問題は、「世界がどのように存在しているのか」という問題と密接に関係しています。つまり、この点において、認識論と存在論は、深く結びついています。そこで、今日は、存在論の基本問題、「実在論と観念論のどちらが正しいのか」を考えたいと思います。

2、ロックの実在論 対 バークリの観念論

ロックは、我々の全ての知識は、経験（感覚と反省）に基づくと主張しました。その感覚は、物自体が我々の心を触発する(affect)することによって生じると考えられていました。

これに対して、バークリ (G e o r g e B e r k e l e y, 1685-1753) は、ロックを批判して、物自体の存在を否定し、観念論を主張しました。彼の主張著作は、『視覚新論』1707、『人知原理論』1710 (岩波文庫) です。

バークリは、ロックの第一性質と第二性質の区別を批判しました。色のない平面は想像できないというわけです。そして、色が第二性質ならば、面も第二性質である、つまりともに主観的なものであると考えました。さらに、バークリは、物質的実体をも、我々の心の内における観念にすぎないと考えました。例えばつぎのように言います。

「私はここにあるサクラランボウを見、それに触れ、それを味わう。存在しないものは、見られもせず、触れられもせず、味わわれることもない。だからサクラランボウは現実に存在していると私は信じている。だがしかし、その柔らかさ、みずみずしさ、赤らみ、甘味をおびた酸味を取り去れば、もはやサクラランボウは存在しない。したがってサクラランボウはこれらの感覚と別個のものではない。だから私は言う。サクラランボウは、種々なる感覚から得られた感性的印象、あるいは観念の集合にほかならない。」

彼の有名な言葉で言えば、「存在とは、知覚されてあることである」"There esse is percipi" ということです。ただし、彼は、心あるいは精神については、それを知覚するものとして存在を認めています。

実在論と観念論のどちらが正しいのでしょうか。いくつかの議論を紹介します。

- 参考文献
- 1、大森荘蔵『言語・知覚・世界』岩波書店
 - 2、神野慧一郎「知覚と実在」(『現代哲学のフロンティア』勁草書房)
 - 3、木村慎哉『知覚と世界』昭和堂
 - 4、エイヤー『哲学の中心問題』法政大学出版局

3、直接実在論＝素朴実在論について

「知覚は、外的な対象を直接に覚知する」という立場。(2-38)

<反論1> 錯覚論法 (argument from illusion)

錯覚以外にも、正常な知覚であっても、事実ではないものがある。

- (1) 草むらに落ちている縄が、蛇に見える。
- (2) 水にいれると屈折する棒。

- (3) 遠くにある円柱形の煙突が長方形に見える。
 - (4) 月の表面が平面に見える。
 - (5) 十円硬貨が、形、色についてえ、角度や光源の具合によって、色々に見える。
 - (6) オアシスの蜃気楼。
 - (7) ゲシュタルト心理学で、両端に矢印がついて、短く見える線や長く見える線の知覚。
 - (8) 眼球を押さえると、物が二重に見える（二重視）。
- 普通の錯覚もまた、特殊な状況の中での正常な知覚であるといえるのではないか。

直接実在論が否定されると、「我々の知覚の直接対象は、知覚表象である」という説をとることになる。これは知覚の因果説（実在論）と観念論に分かれる。

4、観念論

<観念論への反論 1 >

つぎのような現象（諸知覚の整合性）を説明するには、物の実在を認めた方がよいように思われる。

- (1) 複数の人間の知覚の一致。
- (2) 二種類の感覚によって捉えられる感覚があること
例えば、大きさ、形、位置、運動などは、視覚と触覚によって捉えられる。
- (3) 知覚の首尾一貫した変化
例えば、「部屋から出て戻ってみると、蠟燭が短くなっている」。

<反駁> 実在の想定は、なぜ実在がそのように存在するのかの説明をしない限り、知覚の秩序の説明の先送りにすぎない。

知覚やその秩序の原因を求めるのは、現象間に見られる因果関係を何の根拠付けもなく、現象そのものとその根拠へと拡張するものであり、無根拠な拡張である。

<観念論へのさらなる反論>

より詳しい反論を知りたい方は、参考文献 2、3 を見てください。

5、実在論

(1) 知覚の因果説について

実在論は、知覚の秩序を説明するために対象の実在を主張するのであるから、知覚については、「知覚の因果説」を主張することになる。因果説は、〈知覚者の心の働き〉 〈知覚者に働きかける事物〉 〈両者の因果関係〉 の三つを前提ないし主張するものである。ゆえに、因果説にのっとって、実在論を論証することはできない。

この場合には、心身問題ないし心脳問題という難問を解決しなければならなくなる。

補足の議論:空間について

実在論では、知覚空間と物理空間は、同一か異なるかのどちらかである。(文献1 p. 23 6-)

(a) 同一空間説を説明するための投影説

私がコップを見ているとき、コップは、大脳場所になく、眼の前の机の上にある。「ところが、知覚の因果説に従えば、知覚に最終的的同时に対応するのは、大脳状態である。すると、原因としての物理的大脳の状態は、それから離れた場所に知覚像を生じることになる。すなわち、投影(projection)とよばれる事態である。」(1-243)

この場合に投影されているのは、もちろんコップだけではなくて、机もそうだし、床も、壁も、本棚も、見えている私の腕も、コリを感じている私の肩も、そして頭痛のする私の脳の知覚さえも、おのおの物理的空間における実在の場所に投影されている。

たとえば、腕の蚊に咬まれてあかく膨れているところが痒いとしよう。私はその赤いところに痒みを感じ、その赤いところ片方の手で搔けば、痒みは一時的に解消して快感が生じる。見えている手も、搔いている触覚も、搔かれている感触も、すべてが一致している。しかも、痒みが消えて気持ち良くなるのだから、痒みを引き起こす原因である身体そのものの状態(知覚された身体ではなく)が、搔くことによって変化したのであるから、搔くこと搔かれることが、知覚の世界だけでなく、身体そのものの出来事である、と思われるのである。

この知覚空間全体が、実空間に投影されているのである。

<投影説への反論1>

180度反転するプリズムの眼鏡の実験では、最初は、視覚だけが変化して、視覚だけが逆さまの世界に済むことになるが、2週間ほどで、正常の知覚になるそうである。このとき、我々はまた視覚上の指にが机にこのとき、我々は、視角以外の触覚や聴覚などは変化せずに、視覚だけがそれらの適合するように変化したのだと言えるだろうか。おそらくそうだろう。なぜなら、触覚を変化される要因はなかったからだ。つまり変化

していないままの触覚空間が、実空間と一致しているのである。同一空間説を採用するならば、触覚空間が実空間に一致しており、それに定位して視覚空間が調整されたのだといえるだろう。

< 投影説への反論 2 >

この投影が、どのようにして起こるのか説明できない。そもそも、どこへ投影したらよいのだろうか。これを考えると、われわれは、投影など、そもそもしていないように思われる。

例えば、何かを掴むとき、知覚空間での指先の位置は、実世界での指先の位置と一致していなくてもよいのである。ようするに、知覚世界と実世界の物体の位置関係が一一対応していればよいのであって、同一である必要はない。

同一説は、どうして投射が旨く行くのかを説明しなければならないが、その必要がなくなる点で、次の異種空間説の方が有利である。

(2) 異種空間説

(ア) 知覚空間は、実世界の私の大脳の中にあるのか。

私がコップをみるとき、そのコップは私の大脳の前方にあるが、その大脳もまた私の知覚像である。ゆえに、コップの知覚像は、私の大脳の知覚像の外にある。ではこの知覚空間全体は、私の物理的大脳の中にあるのか、そとにあるのか。このように問われたら、中にあると答えるのがよいようにおもわれる。

もし知覚空間が私の大脳の中にあるのだとすると、私が、右手で左手を搔くとき、右手と左手の知覚像は私の大脳の中にあり、しかも本物の右手と左手は私の大脳の外で触れていることになる。実際に触れていないと搔いている触覚が生じないからである。

このように、知覚空間が、実世界の私の大脳中にあるとすると、それは異種空間ではなくて、実空間の中の部分空間であるかのように思われる。しかし、そうではない。私の知覚空間は、大脳のなかにテレビスクリーンのようにあるわけではないからである。それは、大脳の中にあっても、異種空間である。実空間とは異種の空間なのである。ただしその空間は、因果的に大脳と結合しているのである。

(イ) 反論

空想の世界と知覚空間の関係のように、まったく異種の空間ないし異次元の空間なのである。知覚空間と想像空間が異なるように、知覚空間と物理空間は異なる。それが、何処にあるかを、語ることはできない。

しかも、その実空間については、まったく想像ができない。我々は、物体が色をもつとは考えない。物体が無色透明であるとさえ、考えられない。暗闇のような世界だとも

考えることはできない。しかし、我々は、色も明暗ももたない広がり进行想像することができない。

バークリが言うように、色のない広がり进行考える事は出来ない。バークリは、そこから、広がりも主観的なものだと考えたが、そこからのもう一つの帰結は、実世界は、想像不可能な世界である、という帰結である。実世界について、言語や数式でそれを記述することはできるが、想像することは不可能である。

もちろん、実世界を想像できないとしても、实在論は論理的には矛盾しない。しかし、そもそも実世界を想定したのは、知覚世界＝現象界の整合性を説明するためであった。しかし、知覚世界の整合性を説明するために、想定しようとする実世界が、かくも想像しにくいものであるのならば、単に知覚性はこのような法則をもっているのだ、現象界はこのような法則をもっているのだ、と考えたほうが簡単なのではないか。

かりに、実世界の法則性によって、知覚世界の法則性を説明しようとするならば、実世界の法則性は、なにによって説明されるのか。これは、法則性の説明を単に先延ばしにしているだけではないのか。